



「持続可能な開発のための2030アジェンダ」において、「すべての人が読み書きできる世界。すべてのレベルにおいて質の高い教育、(後略)」が目標として掲げられている。

本書は、OECD教育・スキル局長でPISAの創始者である著者が、国際的に比較・分析したOECDのPISAのデータを踏まえて数々の成功例を検証し、世界中の教育界のリーダーたちと共に21世紀の教育政策の立案と実践に取り組んでいることから、2030年に向けて、「どのような教育をしていくべきか?」を読みやすい表現で説いている。文中に示されているエビデンスの図も分かりやすい。



著者 アンドレアス・シュライヒャー
編集 他 経済協力開発機構(OECD)
監訳 鈴木寛、秋田喜代美
3300円 明石書店 ☎03-5818-1171

の内容を検討することは日本の学校教育に有意義である。また、フィンランドやシンガポール等の事例や第3章「成功した学校システムとは」に書かれているタッカー氏のベンチマーク調査等も、日本の学校教育には示唆的である。以下はその一部である。▽ワールドクラスの教育システムのリーダーは、目の前の報酬のために投資するよりも、教育を通して将来に投資するほうが価値があること(後略)、

▽ワールドクラスの学校システムは、高い目標を掲げ、生徒が何をできるようにするべきかを明確にし、生徒に教えるために何が必要かを教員が明確に意識できるようにする(後略)、

▽最も高い成果を上げる学校システムは、システム全体に、まなく高い質の教育を提供するため、全ての生徒が優れた教育から多くのことを学ぶ。このような状態をめざし、これらの国々では最も困難な学校に最も優れた校長を、最も課題を抱える教室に最も優れた教員を配置する。

第2章「神話を暴く」にある「能力別クラスで成績が良くなるのか」「学習時間が多いほど成績が良くなるのか」等では、教育の本質が示されており、こ

教育のワールドクラス 21世紀の学校システムをつくる

(愛知教育大学教授・高橋美由紀)